



Title	「幾何学的な眼」と感覚与件：『青色本』六三～六四頁を読む
Author(s)	中川, 大; NAKAGAWA, Hajime
Citation	哲学, 55, 67-88
Issue Date	2021-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95624
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_t4.pdf



「幾何学的な眼」と感覚与件

——『青色本』六三〜六四頁を読む——

中川 大

ウィトゲンシュタイン (Wittgenstein, Ludwig, 1889-1951) は『青色本』([BB])で、独我論的な言明について検討するにあたって、「幾何学的な眼 (geometrical eye (or eyes))」という観念をめぐる議論を提出している。従来、この議論は、『論理哲学論考』([TLP])での形而上学的主体の比喩としての「眼」という道具立てと結びつけて論じられてきた。

『論考』の5.632から5.633までを引用しておこう (岩波文庫訳をそのまま使う)^[1]。形而上学的な主体が世界のなかに現われないものであることが、眼が視野のなかに現われないことに準えられる。わたしはわたしの世界であり (5.63)、独我論を徹底すると純粋な実在論と一致する (5.64)。

5.632 主体は世界に属さない。それは世界の限界である。

5.633 世界の中のどこに形而上学的な主体が認められうるのか。

君は、これは眼と視野の関係と同じ事情だと言う。だが、君は現実に眼を見ることはない。

そして、視野におけるいかなるものからも、それが眼によって見られていることは推論されない。

5.6331 つまり、視野はけつしてこのような形をしてはいないのである。



さて、永井均は『青色本』を掘り崩す——ワイトゲンシュタインの誤謬（永井「二〇一八」）で、そのような標準的解釈に従いながら、しかし、『青色本』の問題の箇所をそのように読んだばあいに、ワイトゲンシュタインの議論は混乱を呈していると指摘する。本稿での目論見は、永井の指摘から、かれがそうしたようにワイトゲンシュタインが混乱していると結論するのではなく、かえって従来の解釈、つまり、この箇所での議論を『論考』での議論のアップデートバージョンだとみなす標準的解釈の方が誤っていると論じることである。「幾何学的な眼」の議論は、むしろ『論考』的な議論とは別の論点を提示しているはずであり、それは、『青色本』が『論考』を離れて『哲学探究』（PU）へ向かう途上にあることと符節が合うと考えるべきなのだ。

ちなみに、『青色本』で『論考』的な議論の構えがまったく死滅してしまっているわけではもちろんない。本稿で議論の対象となっている長いパラグラフの直後の短いパラグラフは、かなりの程度に『論考』的であると思われる（なにかが見えているときつねに見えているのはこれだ」と、「これ」と言いながら視野全体を抱えるような身振りをする⁽²⁾）。これを、問題の長いパラグラフを『論考』に即して読むことの根拠にしようとする人もあるかもしれないけれども、それははたして妥当だろうか。『青色本』には、『論考』の引力圏に引き戻されそうになっている箇所も、そこから離脱しかかっている箇所も混在している。長大なパラグラフの直後に『論考』的な短いパラグラフが置かれているのは、同種の議論を反復していることをではなく、むしろ、長大なパラグラフが短いパラグラフと同じ素材を扱いつつながら、かえって『論考』とは異なる視点を提示していることをこそ、示唆していると受け取るべきではないか。以下では、まず永井の『青色本』解釈を、それが「幾何学的な眼」を『論考』の眼の延長上に捉える標準的な解釈に沿ったものであることを確認しつつ紹介する。続いて、先行研究や、永井が参照しているムーア（Moore, G. E.; 1873-1958）によるワイトゲンシュタインの講義録をも検討して、永井解釈への疑義を提示する。そのうえで、永井が却下する大森荘蔵の解釈を手掛かりに、『青色本』の問題の箇所についての、標準的な解釈とは異なる、非『論考』的な理解を提示する。

なお、問題の論述はほんらい独我論をめぐるものであるけれども、本稿では独我論そのものについて論じることにはしない。ワイトゲンシュタインがどのような方針でこの問題に向き合おうとしているのかを示すことで満足することにする。（永井均の解釈を詳しく吟味するけれども、永井がそれを足掛かりに展開していく「永井哲学」的な議論については、やはりこれも扱わない。）

ここでのウィトゲンシュタインの論題は、「なにが見られようとそれを見るのはつねにわたしである (when anything is seen, it is always I who see)」⁽³⁾ という独我論的な言明である。ウィトゲンシュタインは、ここでわたしが述べようとしているのは、じつは「なにが見えているときにはつねになにものが見えている (Always when anything is seen, something is seen)」⁽⁴⁾ ということであると、すなわち、見るという経験がなされているあいだずっとそこにあるとわたしが言うのは、わたしという存在者では決してなく、見るという経験そのものだ、と指摘する。そのうえで、このことをはっきりさせるには、この独我論的な言明をする人が、「わたし」と言いながら自分の眼を指さすばあいを想像すればよい、とウィトゲンシュタインは述べる。

しかし、なにをかれは指さしているのか。物理的対象としての同一性をもつ個々の眼をか。(この文を理解するには、物理的対象を表わすとされている語の文法の特徴は、「同じ・これこれ」とか「同一のこれこれ」という句の使い方にあることを思い出さなければならない。ここで「これこれ」は物理的対象を指す。) 上で述べたように、かれは特定の物理的対象を指さすつもりは全然ない。かれがそれでなにか有意味な言明をしたと思うのは、ある混同に起因する。それは、わたしたちが「幾何学的な眼」と呼ぶものと「物理的な眼」と呼ぶものとの混同に対応する混同である⁽⁵⁾。

問題の独我論的言明で意味のある言明をしたように思うのは、ある混同に基づいており、そしてその混同は、「幾

何学的な眼」と「物理的な眼」の混同に対応する、というのである。それでは、ウイトゲンシュタインが「幾何学的な眼」と「物理的な眼」という語に与えているのは、それぞれのどのような用法なのか。ウイトゲンシュタインは、まず、自分の眼を指さしていると判定する様々な規準を採りうることで、そして、それらの規準による判定が必ずしも一致するわけではないことを指摘する。かれは続いて、自分の眼を指さしていることを視覚によらずに判定する方法をいくつか挙げる。手を目のところ上げる運動感覺的経験や、眼に触れる特有の感覚などである。そのうえで、判定規準として視覚を使うばあいについて検討を始める。

視覚による規準については、採用できるものが二つある。わたしの手が上がってきて眼の方に近づいてくるのが見えるという日常的な経験がある。この経験はもちろん、二つのもの、例えば二本の指先が出合うのを見る経験とは違う。他方、わたしに見えることのうちで、わたしの指がわたしの眼の方に動くことの規準として使えるのは、鏡を覗いてわたしの指がわたしの眼に近づくのが見えるときのものである。わたしの身体上の、「見る」とわたしたちが言うことをする場所を、この第二の規準に従ってわたしの指をわたしの眼の方へ動かすことで特定したとしよう。そのばあいには、他の諸規準に従えば鼻の先だったり額のいずれかの場所だったりするものでもって見るようになることがありうる。いや、この伝なら、わたしの身体以外の場所を指さすこともありうる。人にこの第二の規準のみに従ってかれの眼 (his eyes (or eyes)) を指さしてほしいなら、そのとき、わたしは、「あなたの幾何学的な眼 (your geometrical eye (or eyes)) を指させ」と言うことで、自分の意向を伝えることにしよう⁽⁶⁾。

鏡のなかで自分の指が自分の眼に向かうのを認めることを、そしてそのみを判定規準とするとき、それを自分の「幾何学的な眼」を指さすということにしよう、としている。「物理的な眼」という語の用法については明示されないのだけれども、「第二の規準のみに従って」いるときに「幾何学的な眼」を指さすと言われているその文脈からすれば、鏡を使った規準以外の視覚的な規準（自分の手が上がってきて自分の眼に近づいてくるのを見る日常的な経験など）や、さらには視覚以外の運動感覚や触覚等をも動員して自分の指が自分の眼を指しているのだと判定するばあいには、それは「物理的な眼」を指していると言われるのであろう。

このように読むのは、ウイトゲンシュタインのテキストに馴染みの少ない読者にとっては、むしろ当然のことではないかと思われる。しかしながら、多くのウイトゲンシュタイン研究者は、そうは読まないようなのである。例えば、永井均は、この「幾何学的な眼」と「物理的な眼」の議論は優れた議論である、としながら、しかしこの議論には混乱があると主張して、以下のように述べる。

この二種の目の区別にかんしてウイトゲンシュタインはまずこう言っている。「私の手が上がって目の方向に来るのが見える、という日常的体験が存在するが、これはもちろん、二つの物が、たとえば二本の指先が出合うのが見えるという体験とは違う。」前者（目は視野を開いているだけでそれ自体が見えてはいない）が幾何学的な目で、後者（二つの物）のうちの一つが目であって、それもまた見えている場合）が物理的な目である。したがって、次の「しかし他方で、私の指が私の目の方向に動くことの基準として、鏡を見ると、私の指が私の目に近づいているのが見えるということを使うこともできる」と言われているときの「私の目」は物理的（身体的）な目であるはずである。それは、そこから視野が開けているという意味での「目」ではなく、身体表面にある（そ

の位置と形態から）「目」と呼ばれている箇所だからである⁷⁷。

永井が「目は視野を開いているだけでそれ自体が見えてはいない」と述べているのは、『論考』における主体の比喻としての眼、すなわち視野のうちには決して現われない眼のことを言っているのだということを見て取ってほしい。第一の規準では、こちらに近づいてくる指は見えるが、眼そのものが見えるわけではない。一方、第二の規準（鏡を使った規準）では、鏡に映ったものとはいえ、眼がまさに見えているのである。そして、物理的な眼が視野のうちに現われないというのはおかしいことであるのだから、第二の規準によって特定される眼が物理的な眼であるのなければならぬ。となれば、第一の規準によって特定される眼、「視野を開いているだけでそれ自体が見えてはいない」眼こそが幾何学的な眼であるに違いない。

このようにして、わたしたちが「幾何学的な眼」として理解するものを永井は「物理的な眼」として理解し、わたしたちが「物理的な眼」として理解するものを永井は「幾何学的な眼」として理解する、という解釈の逆転が起こっている。永井は、自分の読みへの傍証としてムーアの「ワイトゲンシュタインの講義 一九三〇—三三」〔WL〕を引用したうえで、以下のように続ける。（ムーアの記録については、後で検討する。）

だが、そうだとすると、『青色本』の本文に戻って、前の文章に続く箇所、すなわち「私の身体にある、われわれが「見る」と呼ぶことをするその場所が、第二の基準によって、私の指を私の目の方向に動かすことによって決定されるべきであるとすれば、私は、他の諸基準によれば、鼻先や額で見ることになるかもしれない。あるいは、このやり方で、私は私の身体の外にある場所を指さすことになるかもしれない。」という箇所には疑問が

ある。この「第二の基準」（つまり物理的な目）は、これでも意味が通じないことはないが、どちらかといえばむしろ「第一の基準」（つまり幾何学的な目）のほうが議論のつながりがよくわかる。なぜなら、「見る」と呼ばれていることをする場所（つまり目）が幾何学的な基準によって——すなわち「この基準」を開く原点として——決定されたとき、物理的な基準から見ればそれが「鼻先や額」や「身体の外にある場所」であることはたしかにありうることで、そのことを指摘して「幾何学的な目」と「物理的な目」の乖離の可能性を説くことこそがこの場所の趣旨であつたほうがよいからである。本文の記述通りに解すると、すなわち、目の位置がある物理的な基準（ここでは鏡を使つた基準）によつて決定されたとき、その目が他の諸基準から見ると「鼻先や額」や「身体の外にある場所」にあることもありうるという意味になり、それももちろんありえなくはないが、それはたんに基準ごとに従つた結果が変わりうるという当たり前のことを言っているにすぎないことになる。これはひよつとすると鏡の外の意味で言われているのかもしれないが、そもそも鏡は目を物理的な（つまり見られる側の）対象とするために導入されたただけなのだから、鏡の外か内かという問題はここで本質的な（つまり物理的か幾何学的かという）問題とは独立のはずである。

それに続けて「だれかに第二の基準だけによつて自分の目を指さしてほしいとき、私はこの意向を「あなたの幾何学的な目を指さしてください」と言うことによつて表現することにする」と言われているが、以上の説明が正しければ、これは誤りでなければならぬ。この「第二の基準」は「第一の基準」でなければならぬからである⁸⁾。

永井はさらに、上で引用した箇所に続く、幾何学的な眼と感覚与件とのウィトゲンシュタインによる類比について

も、それを大森莊蔵のように理解するのであれば誤りであると指摘している。(大森の解釈についても後述する。)

さて、永井の『青色本』を掘り崩す』の論述を追ってきたのだけれども、しかし、このテキストについての永井のような解釈は、はたして妥当なのだろうか。それは、ウイトゲンシュタインがたんに「混乱」しているとして済ますには、あまりにあからさまに話があべこべになってしまう解釈だと言わざるをえないのではないか。

とはいえ、永井の読み方は、むしろ主だったウイトゲンシュタイン読みたちによって従来おこなわれてきた読み方に即したものである。次節では、そのような実情を、先行研究を検討することを通じて確認するとともに、永井が援用しているムーアによるウイトゲンシュタインの講義の記録についても見てみよう。

2

ヒンティカ (Hintikka, J.) は、二〇〇七年の論文で、まさに『青色本』の六三―六四頁を引用しながら、次のように述べている。

ウイトゲンシュタインは、この「現象学的対象と物理的对象という」論点を、かれが「幾何学的な眼」と「物理的な眼」と呼ぶ観念に適用している。後者が「物理的な対象」である。それに対して、前者は、わたしの視野の展望点 (the perspective point in my visual space) である。幾何学的な眼は、わたしの視野の原点 (the origin of my visual space) であり、際立つて特権的な現象学的対象なのだ⁽⁶⁾。

ここでのヒンティカの「幾何学的な眼」の特徴づけは、永井が「そこから視野が開けているという意味での「目」と呼び、「目は視野を開いているだけでそれ自体が見えてはいない」としている「幾何学的な眼」の特徴づけと同工異曲であるのは明らかであろう。

また、ペアズ (Pears, D.) も同じく二〇〇七年の著作で、以下のように論じている。

物理的な眼はもちろん身体の特定部分と同定される。しかし、幾何学的な眼は、光学刺激を受容した先の焦点 (the focal point behind the reception of optical stimulation) であり、独立した同定基準をもたない抽象的存在者である。これら二つの区別「抽象的で捉えがたい主観としての自我と心をもつ身体として日常的に現われる人々との区別と、幾何学的な眼と物理的な眼との区別」は平行線上で展開されており、幾何学的な眼の抽象的性格は捉えがたい自我の抽象的性格を説明するために用いられている。これは明らかに、『論考』5.632-5.633の展開である⁽¹¹⁰⁾。

ペアズが明記し、ヒンティカの論文においても明記こそしていないものの、その内容から明らかなように、かれらは『青色本』の「幾何学的な眼」を、『論考』の形而上学的主体の比喩としての「眼」という考え方の延長線上で理解しようとしている⁽¹¹¹⁾。しかしながら、改めて考えてみると、『論考』と『青色本』のテキストのうちにこのように理解するのに十分な材料があるわけではない。どちらにおいても独我論についての議論がなされるなかで眼が引き合いに出されている、という、それだけなのである。

とはいえ、『論考』と『青色本』に限定するのではなく、形而上学的・抽象的な自我を意味する「幾何学的な眼」

という用語は、ウイトゲンシュタインが残したテキストのなかにも現われる。『青色本』とそう違わない時期に書かれたと推定される「私的言語」と「感覚与件」についての講義のためのノート〔NL〕¹¹だ。しかしながら、それらのテキストが『青色本』の解釈のために援用できるのかというと、かなり怪しい。というのも、『青色本』で「幾何学的な眼」が現われるのは、「自分の眼を指させ」という命令に従っているかどうかを判定する規準、という脈絡であるのに対して、「講義のためのノート」での「幾何学的な眼」は、まさしく「自我」と置き換え可能な使い方をされているのであって、自分の眼を指さすことと直接関連しているとは思えないからである¹²。

なお、『青色本』での「幾何学的な眼」が単数形と複数形を併記しているのに対して、「講義のためのノート」の「幾何学的な眼」は単数形でしか出てこない。このことは留意するに値するだろう。自我の比喻としての眼であれば、複数あるのはとりあえず奇妙だからだ¹³。

『論考』と「講義のためのノート」から言えるのは、たかだか、ウイトゲンシュタインが「幾何学的な眼」という用語を、抽象的な形而上学的自我という『論考』的な道具立てを表わすために使うこともあったということであって、それは、『青色本』の議論を読み解くのに直接役立つようなことではないと言わなければならない。したがって、永井が『青色本』の問題の箇所を読むにあたって、『論考』も「講義のためのノート」も引き合いに出さないのは、まっとうなことと言わべきであろう。永井が代わりに持ち出すのは、ムーアの「ウイトゲンシュタインの講義 一九三〇―三三年」〔WL〕である。永井にならって藤本訳をそのまま示す。「肉体的な眼」とあるのが「物理的な眼」のことである。

わたくしにとっては確かに真であると思える一つの論点、すなわち、わたくしには肉体的な眼がなくとも、あるいは全く肉体がなくとも物が見えるのであって、見えることと肉体的な眼との関係は経験上学んだ事実にすぎ

ず、全然必然性をもたない、という論点については全くはつきりしているように見えた。ただし、「視野」にはある種の内的性質があつて、その中でのある物体の運動を、「自分の眼」へ向つて来たり、離れて行つたりする運動として記述することはできるのであるが、その場合「自分の眼」というのは自分の肉体的な眼を意味しないし、また視野の中にある何ものをも意味しない、とも言つた⁽¹⁾。

引用した部分のすぐ後で「視野の眼 (the eye of the visual field)」とも言い換えられている「自分の眼」が、『青色本』の「幾何学的な眼」にあたる、というのが永井の所見である。ムーアによる講義録での「視野の眼」は、「物理的な眼」と対比される用語であつて、しかも、視野において何かがそこへ向かつてきたりそこから離れていたりする、視野のうちにはないにかである。したがつて、『青色本』での「わたしの手が上がつてきて眼の方に近づいてくるのを見る」という日常的な経験」というのは、ムーアの講義録で「視野の眼」を特徴づける経験に相当するのであつて、これが特徴づけるのは「物理的な眼」ではなく、むしろそれと対比される「幾何学的な眼」なのでなければならぬ。

ムーアの講義録における論述は、たしかにたんなる自我の比喻としての眼ではなく、まさに「眼」を特定しようとする文脈にある。その点で、『青色本』の問題の箇所により適合的である。一方で、それは視野と関連づけられるがゆえに『論考』の議論との関係も指摘しやすい。「幾何学的な眼」を標準的解釈に従つて理解しつつ、なおかつ『青色本』での議論と接合させるためには優れた典拠であろう。とはいへ、ここには「幾何学的な眼」という語は現れないのであつて、たとえば、「物理的な眼」という語と「幾何学的な眼」という語とがセットになつて現われるときにはこのような使われ方でなければならぬのだ、と主張しようとするなら、それにはまだ弱いと言わざるをえない⁽²⁾。

そして、なんといつても、幾何学的な眼を「わたしの手が上がってきて眼の方に近づいてくるのを見るという日常的な経験」によつて特徴づける解釈では、後に続く『青色本』の論述を整合的に読むことはできず、実際に書かれていることはほとんど正反對に読み替えてやらなければならないことを、永井自身が指摘しているのである。そうであるならば、標準的な解釈を捨てて、この箇所での議論をそれとして理解することができないかどうか探してみるのが、むしろ自然ではあるまいか。

そのように考えたときに浮かび上がってくるのが、大森莊蔵の翻訳である。永井は、大森訳を参照しながら、自分の理解が正しいならば大森の理解は間違っているはずだ、と述べている。永井の理解でうまくないのであれば、大森の解釈が息を吹き返すのではないか。大森の解釈を手掛かりとして、『青色本』の問題の箇所を、標準的解釈とは違つたしかたで読み解く途がないか検討してみよう。

3

永井がワイトゲンシュタインの混乱を指摘するとともに大森の解釈が誤っていると述べているくだりは以下のとおりである（冒頭部は既出）。

それに続けて「だれかに第二の基準[・]だけによつて自分の目を指さして欲しいとき、私はこの意向を「あなたの幾何学的な目を指さしてください」と言うことによつて表現することにする」と言われているが、以上の説明が正しいければ、これは誤りでなければならぬ。この「第二の基準」は「第一の基準」でなければならぬからで

ある。大森莊蔵氏は、その次の箇所（「幾何学的な目」という語の文法は「物理的な目」という語の文法に対して、「木の視覚的感覚与件」という表現の文法が「物理的な木」という表現の文法に対するのと同じ関係にある。」）を説明して、「他の触覚等の基準から切り離された鏡像の基準が視覚的感覚与件の基準に相当するからである」と言っているが、そうだとすると、これもまた誤りでなければならないことになる。鏡像は物理的な目を示すためのものであり、感覚与件ではなく物理的な木のほうに対応するからである⁽¹⁶⁾。

大森が説明していると永井が言っているのは、『青色本』の大森訳での割注のことである。

「幾何学的眼」の語の文法が「物理的眼」の語の文法に対する関係は、「木の視覚的感覚与件」という表現の文法が「物理的な木」という表現の文法に対する関係と同じである。「他の触覚等の基準から切り離された鏡像の基準が視覚的感覚与件の基準に相当するからである。その関係の両項の」「一方は他方とは別種類の対象である」と言うことは、いずれの関係にあつてもすべてを混乱させる。感覚与件は物理的事物とは違う種類の対象だと言う人は、数は数字とは別種の対象だと言う人と全く同様、「種類」という語の文法を誤解しているからである。そう言う人は自分では「列車と駅と車輛とは種類の違う物だ」、といった発言をしているつもりだが、実は彼の言明は「列車と鉄道事故と鉄道規則とは種類の違う対象だ」と言うに類しているのである⁽¹⁷⁾。

長い割注がはいっているのは、大森にとつてもこの部分は読みにくかったということなのであろう。一方、大森は訳していて理解できなかったところには「理解できない」と注を付ける人であり⁽¹⁸⁾、この部分にそのような注はない

ので、この割注を入れることによって大森は理解できたのだと推測される。

触覚や視覚を総動員して「まっすぐな棒」と認められるものも、特定の状況で特定の視点から観察したときには「まがった棒」に見える。そのばあいには、まがった棒を、物理的な対象としてのまっすぐな棒とは別種類の対象（感覚与件という対象）と考えるのはおかしいだろう、というのが、大森が理解した、ここでのウィトゲンシュタインの論述の趣旨であろう。

そして、「幾何学的な眼」と「物理的な眼」との関係が、「木の視覚的感觉与件」と「物理的な木」との関係と平行的であるというのだ。大森が割注で説明しているのは、「木の視覚的感觉与件」が、木を視認するということを、他の基準と切り離したある基準のみを適用して判定したときに使用される語であるのと同じように、「幾何学的な眼」とは、触覚等の他の基準を排除して、ある特定の基準のみによって、自分の指が自分の眼に近づくのを判定するときに使われる語だということである。すなわち、先に引用した箇所ですべて、鏡のなかで自分の指が自分の眼に近づくのを見るという基準のみによって自分の指が自分の眼に近づくのを判定するときに使用される、ということにほかならない。

永井もおそらく、そのような読み方がありうることはわかっている。再度の引用になるけれども、次のように述べているのだから。

本文の記述通りに解すると、すなわち、目の位置がある物理的な基準（ここでは鏡を使った基準）によって決定されたとき、その目が他の諸基準から見ると「鼻先や額」や「身体の外にある場所」にあることもありうるという意味になり、それもちろんありえないが、それはたんに基準ごとに従った結果が変わりうるという当

たり前のことを言っているにすぎないことになる⁽¹⁹⁾。

そんなことは当たり前ではないか、と言うのである。しかし、ここは当たり前のことでなければならぬ。「幾何学的な眼」という用語を適用するための規準に従ってことばを使うことが可能だからといって、幾何学的な眼という、物理的（肉体的）な眼と異なる種類の眼が存在するなど考える者はいない。当たり前である。しかし、それとまったく同様のしかたでその用法が定められる「視覚的感覚与件」については異様なことに、この語を使ううちに、人は物理的対象とは異なる種類の、感覚与件なる対象が存在するかのような哲学的幻想になぜか囚われてしまう、というのがウィトゲンシュタインの指摘していることだろうからである。

もつとも、ウィトゲンシュタインの記述どおりに「幾何学的な眼」という語の規準と「物理的な眼」という語の規準が食い違うばあいというのを再構成しようとすると、必ずしもすつきりとはしない⁽²⁰⁾。とはいえ、以下のように考えれば、いちおうは理解できるのではないか。

自分の右側に鏡を置く。その鏡を横目で見ながら、手を持ち上げる。鏡を経ずに直接眼にはいる情報や、運動感覚・筋肉感覚による情報は無視して、鏡のなかでどのようなになっているのかだけが問題とされる。さて、図1のように見える。第二の規準に従って、自分の指が自分の幾何学的な眼をさしている⁽²¹⁾。

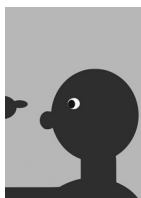


図1

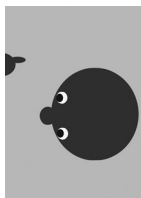


図2

しかし、そのとき、なんらかのしかたで上から見たとすると、そして、自分の運動感覚や筋肉感覚から得られる情報などをも考慮に入れば、じつは、図2のようになっていたのかもしれない。つまり、第二の規準とは別の諸規準に従えば²²⁾、自分の身体の外部のどこかを指していることになるかもしれない。

この議論のばあい、鏡像では人物にとつての左右方向の位置の違いが捨象されてしまうことが利用されている。同様に、鏡像で人物にとつての上下方向の位置の違いが捨象されることを利用した議論をしよう。そうするなら、第二の規準では自分の眼を指していることになるけれども、他の諸規準によれば鼻先や額のどこかを指していることになるばあいがあると言える。

さまざまな視覚情報、そして筋肉感覚や運動感覚をも総合すれば（つまり物理的には）、自分の鼻先を指さしたばあい（図3）と自分の額のどこかを指さしたばあい（図4）とは、まったく異なっている。しかし、例えば頭上にある鏡でそれを見たときには（複数の鏡を組み合わせたかもしれないが）、どちらも同じように見えるだろう。そして、それは、自分の眼を指しているばあい——図1を、今度は物理的な眼を指しているところを描いたものとして見てほしい——であつてもそうだろう。すなわち、鏡の基準に従つて幾何学的な眼を指しているのだけれども、物理的には鼻先を指さしていたり、額のどこかを指さしていたりすることがありうるだろう。

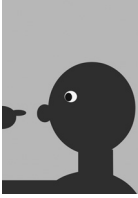


図3

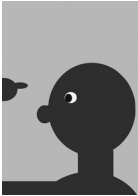


図4

このように、「自分の眼を指さす」ことになる規準を限定して、通常とは違ったしかたで「自分の眼を指さす」という表現を使用することは十分に可能だろう。そして、そのようなときにそれを「自分の幾何学的な眼を指さす」と言うことにすることも、十分に可能であろう。しかし、だからといってそのことによって、幾何学的な眼という、つね日頃わたしたちが「眼」と呼んでいるものとは別の種類の眼が発見されたのだとは、だれも主張しない⁽²⁾。

しかし、幾何学的な眼という新しい眼を「自分の幾何学的な眼を指さす」規準を設定することによって発見したと述べるに等しい主張を、哲学はしばしば展開する。知覚の規準を限定して言語を使用することにおいて、感覚与件という新しい対象をみいだしたかのごとく語ったりするように。そして、「わたし」という語を限定したしかたで使用するに於いて、形而上学的なわたし（自我）をみいだしたかのごとく語ったりするように。

ウィトゲンシュタイン自身が、「わたし」という語を使うときに示唆されるものを、「眼」に準え（『論考』）、「視野の眼」と呼び（ムーアによる講義録）、さらに「幾何学的な眼（単数形）とも呼ぶ（『講義のためのノート』）ことによって、そのような幻影に獲えられてきた。しかし、わたしたちが検討してきた『青色本』の問題の箇所において、かれはそうした幻影を克服する方途に手を掛けつつある。隠されていたものを発見したかのように語るのではない。「わたし」という語の使用を、ただ注視するのでもない。

註

(1) 野矢「二〇〇三」、一一六～一二七頁。

(2) [BB], p.64.

(3) [BB], p.63.

(4) *Ibid*.

- (5) *Ibid*
- (6) [BB], p.64
- (7) 永井「二〇一八」, 二〇一頁。(親本一五二頁)
- (8) 永井「二〇一八」, 二〇二〜二〇四頁。(親本一五三〜一五四頁)
- (9) Himikaka[2007], p.553. ()内は中川による補う。
- (10) Pears[2007], p.110. ()内は中川による補う。
- (11) 同様の論述あり。他には Stenl[1996], pp.75-76や Park[2012], pp.99-100を参照されたい。
- (12) 「講義のためのノート」に「幾何学的な眼」が現われるのは以下の二箇所である。

「見られているものはわたしが見ている」(わたしの身体を指さしながら)。こう言いながらわたしが指さすのはわたしの幾何学的な眼である。あるいは、眼を閉じて指さし、わたしの胸に触れ、それを感じる。いずれのばあいもわたしは、見られているものとある人物を関連づけているのではない。(NL, p.255.)

「わたしはそれでも恵まれている (Ich bin doch bevorzugt)。わたしは世界の中心である」。こう言いながら、そしてわたし自身を指さしながら、わたしが鏡のなかにわたし自身を見たとき。だとしても、それは正しいのだろうか。

わたしが独自の役割を果たすとわたしが言うとき、わたしがほんとうに意味しているのは幾何学的な眼である。(NL, p.257.)

標準的解釈を補強するためというわけではないものの、Pears[2007]や Park[2012]は、これらのテキストにも言及している (Pears[2007], p.117, Park[2012], p.97)。ただし、それらを援用してなされているのは、あくまで形而上学的自我についての議論であって、自分の眼を指さしているかどうかを判定する規準という、『青色本』で「幾何学的な眼」が登場する文脈は無視されている。

- (13) 「眼を閉じ」(NL, p.255)の「眼」は複数になっている。こちらは具体的な眼なのである。

- (14) [WL], p.98. 藤本「一九七」, 九二頁。

- (15) 翻訳されている講義録は、ムーア自身が論文ふうの形にまとめて一九五四〜五五年に *Mind* 誌に掲載したのち、最晩年に『哲学論文集』(Moore

[1959]) に収録したものである。なお、ムーアの記録を原形に近い姿で再現した書物も刊行されているけれども、そちらに当たっても事態は好転しない。それでも、現われるのは「物理的な眼」と「視野の眼」の対であつて、「幾何学的な眼」という用語は出てこない。cf. [WLC], pp.270-271.

(16) 永井「二〇一八」、二〇四頁。(親本一五四頁。)

(17) 大森「一九七五」、一六頁。(文庫版一四八頁。) 大森の割注を太字で強調したのは中川である。

(18) 同右書、一〇二頁(文庫版二七頁)を参照されたい。

(19) 永井「二〇一八」、二〇三頁。(親本一五四頁。)

(20) 黒崎宏は、「この、規準に「鏡」を使う話しは、全く論理的な話であつて、現実に成立している光学の法則を前提にしてはならない」と注釈を付けている(黒崎「二〇〇二」、一〇九頁)。しかし、ほんとうにそうであるならば、ワイトゲンシュタインがここでわざわざ鏡を持ち出すのは、まったくもって支離滅裂なことをしているということになってしまうのではないか。

(21) 中島孝一さんから、鏡に正対して、横から指さすのを見るところを想定する方が自然なのではないかと指摘された。たしかにそうかもしれない。

(22) ウイトゲンシュタインが、「第二の規準 (the second criterion)」と「単数形」と「他の諸規準 (other criteria)」という複数形を使い分けていることに留意するべきである。

(23) わたしたちの解釈においてにせよ、標準的な解釈(あるいは、「講義のためのノート」でのワイトゲンシュタイン自身の語法)においてにせよ、問題の眼がなぜ「幾何学的」と呼ばれるのかは、必ずしも判然としない。標準的解釈でそれが「幾何学的」と呼ばれるのは、おそらく(ヒンティカが)あからさまに言い換えているように、遠近法的な投影における視点のようなものが想定されているからであろう。それが認められるのであれば、わたしたちの解釈において、物理的な立体が鏡の平面上へと遠近法的に投影されたものを「幾何学的」と呼んだところで、さして不都合は無いように思われる。若き日のワイトゲンシュタインが親しんでいたであろう書物等で、射影幾何学や画法幾何学などの投影にかかわる数学が、幾何学の基礎論として扱われていたことは、考慮に入れるに値する。以下の文献を参照されたい。Russell, B. *An Essay on the Foundations of Geometry*, 1897, Cambridge U.P.; Russell, B. *The Principles of Mathematics*, 1903, George Allen & Unwin; 『ホワイトヘッド著作集 第一巻 初期数学論文集』、橋口正夫・松本誠・藤川吉美訳、一九八三年、松籟社。

文献略号表

ウィットゲンシュタインの著作（ムーアによる講義録を含む）は以下の略記号で示す。

- [BB]: 'The Blue Book', pp. 1-74 in Wittgenstein, L., *The Blue and Brown Books: Preliminary Studies for the Philosophical Investigations*, 1958, 1969, Basil Blackwell.
 - [NL]: 'Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data"', pp.202-288 in Wittgenstein, L., *Philosophical Occasions, 1912-1951*, Edited by Klagege, J. & Nordmann, A., 1993, Hackett.
 - [PU]: Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations*, Translated by Anscombe, G. E. M., 1953, 1958, 1973, 2009.
 - [TLF]: Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922, 1961.
 - [WL]: Wittgenstein's Lectures in 1930-33', pp.46-114 in Wittgenstein, L., *Philosophical Occasions, 1912-1951*, Edited by Klagege, J. & Nordmann, A., 1993, Hackett.
 - [WLC]: *Wittgenstein: Lectures, Cambridge 1930-1933: From the Notes of G. E. Moore*, Edited by Stern, D. G., Rogers, B., & Citron, G., 2016, Cambridge U.P.
- その他の著作（ウィットゲンシュタインの著作の翻訳や注解を含む）は以下の略記号で示す。
- 藤本「一九七七」: G・E・ムーア「ウィットゲンシュタインの講義 一九三〇-一九三三年」藤本隆志訳、『ウィットゲンシュタイン全集二〇 講義集』一九七七年、大修館書店、一〇〜一二二頁。
 - Hintikka [2007]: Hintikka, J., Wittgenstein's 'Times (And Ours)', pp.539-556 in Stadler, F. & Stöltzner, M. (eds.), *Time and History: Proceedings of the 28 International Ludwig Wittgenstein Symposium, Kirchberg Am Wechsel, Austria 2005*, 2007, Ontos Verlag.
 - 黒崎「一〇〇一」: ウィットゲンシュタイン『「論考」・「青色本」読解』黒崎宏訳・解説、二〇〇一年、産業図書。
 - Moore [1959]: Moore, G. E., *Philosophical Papers*, 1959, George Allen & Unwin.

永井[二〇一八]：永井均『青色本』を掘り崩す——ウィトゲンシュタインの誤診、二〇一八年、講談社学術文庫。（親本・永井均『ウィトゲンシュタインの誤診——『青色本』を掘り崩す、二〇一二年、ナカニシヤ出版。）

野矢[二〇〇三]：ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』、野矢茂樹訳、二〇〇三年、岩波文庫。

大森[一九七五]：「青色本・茶色本」、大森荘蔵訳、『ウィトゲンシュタイン全集六 青色本・茶色本 他』、一九七五年、大修館書店、一〇二九七頁。（文庫版：ウィトゲンシュタイン『青色本』、大森荘蔵訳、二〇一〇年、ちくま学芸文庫。全集からの「青色本」部分のみの文庫化。）

Park[2012]：Park, B.-C., *Phenomenological Aspects of Wittgenstein's Philosophy*, Synthese Library, 2012, Springer.

Pears[2007]：Pears, D., *Paradox and Platitude in Wittgenstein's Philosophy*, 2007, Clarendon Press.

Stern[1996]：Stern, D. G., *Wittgenstein on Mind and Language*, 1996, Oxford U.P.